

特別活動学習指導委員会

一 研究テーマ

子ども一人ひとりの思いや考えを生かし、考えを深められる集団の育成

二 テーマ設定の理由

本委員会では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、様々な手段や方法を実践・研究していくことに取り組みたいと考えた。「深い学び」とは、集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせる集団及び自己の問題の解決に活用していくことだと考える。この深い学びを実現するためには、一人一人の思いや考えを生かし、友との対話を通して解決策を見いだす。そして実践・ふり返りを行う。この一連の活動をくり返すことが、考えを深められる集団につながるのではないかと考え、上記のようなテーマに設定することにした。

三 研究の経過

第1回 5月 7日（火）総委員会・顔合わせ・研究テーマと推進計画立案

第2回 6月20日（木）実践事例の検証・教育課程演習内容の検討

第3回 6月24日（月）教育課程研究協議会事前授業参観（柗津小学校）

第4回 7月18日（木）教育課程研究協議会午後の部について

第5回 8月30日（金）教育課程研究協議会の内容確認

第6回 9月 5日（木）教育課程研究協議会参加（柗津小学校）

研究協議の運営

- ・特別活動学習指導委員会の活動説明 レポートの紹介（小学校1本、中学校2本）
- ・話し合い活動に寄せて～日々の実践に基づいた工夫や悩みについて～（グループ協議）

第7回 11月28日（木）研究のまとめと今年度の反省・発表会へ向けて

第8回 1月21日（木）発表会参加

四 研究の内容

本委員会では、「学習指導要領」の方向性を踏まえて実践・研究していくことを決め、それぞれが取り組んでいくことにした。中でも「特別活動の目標」に書かれていることを重要視していくこととした。

〈知識及び技能〉 （1）多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする。	〈思考力、判断力、表現力等〉 （2）集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。	〈学びに向かう力、人間力等〉 （3）自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、人間として（自己）の生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う。
---	---	--

上記の目標を意識しながら、それぞれの学校で継続的に特別活動の実践を積み重ねていくこととした。

考えを深められる学級会の在り方について

私は今年度、クラスの課題について学級会を通して解決していく方法を研究してきました。その実践について以下紹介していきたいと思います。

(1) 年度当初クラスがあげた課題と1年間の方向性について

年度当初クラスのみならずもっとクラスがよくなるために、今どんな課題がクラスにあるのか全員で話し合いました。その結果が以下の7点です。

- ① けがにつながるけんかや遊び
- ② 給食当番を忘れる
- ③ 無言清掃ができない
- ④ チャイム着席ができない
- ⑤ 授業中に静かに集中して聴くことができない
- ⑥ 整列ができない
- ⑦ 整理整頓ができない

そこで、これらの課題を解決するために子ども達につけさせたい力として、「①理由を明確にして伝える力②集団として話し合いの中で合意形成を図り実践する力」を設定することにしました。そしてそれらの力は、学級会を通してつけることができると考えました。また一年間、「話し合いのスキルを身につける」ことや、「問題の発見→解決方法の話し合いや解決方法の決定→決めたことの実践→振り返り→次の課題解決へ」を繰り返し行うことで、子ども達につけさせたい力がつくのではないかと考えました。これは、特別活動の目標でいうと、目標(2)「集団や自己の生活、人間関係の課題を見いだし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。」にあたります。

(2) 学級会の取り組みについて

学級会では、「話し合いのスキルを身につける」「スパイラルを意識して学級会を進める」を意識して進めてきました。

●話し合いのスキルを身につけさせるために行ったこと

①ホワイトボードの活用

一人に一枚ホワイトボード(学校にある物)と赤・黒のマーカー(学年費から)を配布し、クイズ大会を複数回行い、まずホワイトボードになれる活動をしました。

②オープンクエスチョンの活用

「質問の技カード」を使いながら、友だちに「好きな食べ物は何?」など一つの質問を決め、話を深めていく練習をしました。また、理由や根拠、大切な言葉や伝えたいことは色を変える等、理由を明確にすることや、2色のマーカーの使用方を指導しました。

③思考ツールの活用

クラゲチャートやイメージマップなどを紹介し、考えをまとめたり、様々なアイデアを出したりする方法を練習しました。

これらの練習を1学期はくり返し行ってきました。成果としては、1学期が終わる頃には、理由を必ずいえるようになったり、自分たちで思考ツールを選ぶようになったり、考えを深める質問をしたり、相手を意識してホワイトボードにまとめたりできるようになってきました。それと同時に、話を聴くことができなかった子が、友だちの話に耳を傾け、真剣に考えながら聞けるようになってきました。これらの活動を通して、学級会での話し合いも活発になってきました。

● 「スパイラルを意識して学級会を進める」で行ったこと

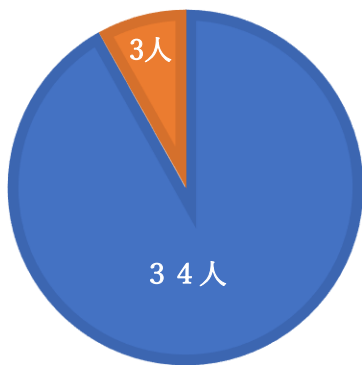
「問題の発見→解決方法の話し合いや解決方法の決定→決めたことの実践→振り返り→次の課題解決へ」というスパイラルについて1学期に行った特別活動を例に紹介します。

子ども達と色々な議題で学級会を進めていくうちに、せっかく38人もいるんだから色々な人と仲良くなりたいという声が多く聞こえるようになってきました。そこで、「クラスの絆を深めるイベントを企画しよう」という議題で話し合いが行われました。絆を深めるというのは、学級目標を達成することだと全員で共通理解をしたうえで、みんなで夏祭りを計画しようということになりました。次の学級会では、その方法についてそれぞれが考えを持ち寄り、話し合いをすることになりました。継続的に続けてきた話し合いのスキルをいかして、子ども達がお互いの考えを出し合いながら、上手に合意形成をしていました。その結果、クラスの係で7つの出店を出す。係の中を二つに分け、運営と出店を回る人に分ける。準備から片付けまで2時間（授業時間）で終われる物にする。友だちと協力する。傷つけるような言葉を言わない。みんなが平等に楽しめる内容にする。プレゼントや景品はお金のかからない物にする。というルールになりました。休み時間を使って計画的に準備を進め、当日最初から最後まで子ども達だけで進めることができました。そして、時間内に無事終わることができました。

振り返りの結果は以下のようにになりました。

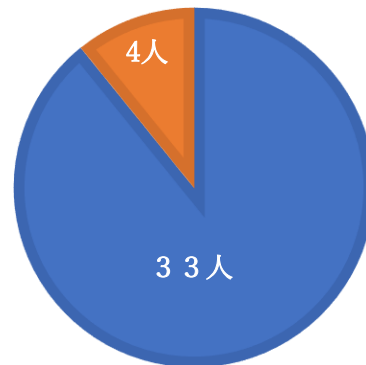
夏祭りは楽しかったですか？

■ はい ■ ふつう ■ いいえ ■



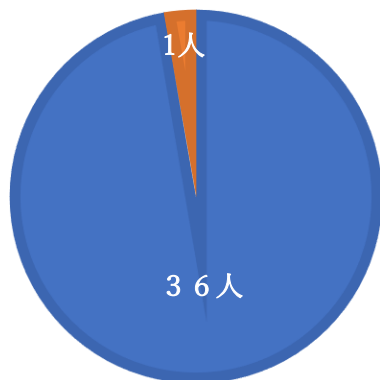
めあてを達成できましたか？

■ できた ■ ふつう ■ できなかった ■



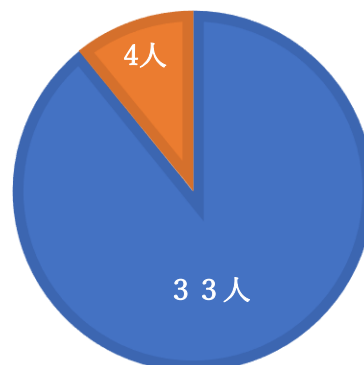
理由を言うことができましたか？

■ できた ■ ふつう ■ できなかった ■



学級会の流れを理解できましたか？

■ できた ■ ふつう



- 楽しんでもらえるように何度も試した。
- お客さんが当たったとき、笑顔で喜んだ。
- プレゼントがなくなったとき、自分の分をあげた。
- 友だちの気持ちを考えて行動できた。
- 並んでいたとき、一度もやったことのない人を先にしてあげた。
- 射的で当たらなかった人におまけをしてあげた。
- お客さんをたくさんほめて喜んでもらった。
- 元気で楽しくできた。
- ルールを守ることで相手も楽しめるようにした。
- いつも笑顔が私たちの出店の決まりで、お客さんもみんな笑顔になった。
- 体が接触するような遊びをしなかった。
- お店を回るときに走ると危ないから歩くように声をかけた。

振り返りの内容を見ていると、笑顔で接客したり、喜んでもらえる行動をしたりと、他者意識の向上が見られました。多くの児童が満足する結果となり、達成感を味わっている様子が見ていても感じる事ができました。しかし、次の課題へつながりそうな反省もありました。

- ▲楽しくできたんだけど、片付けの時に遊んでいる人がいた。
- ▲お客さんが途中からいなくなってしまっまひまなときがあった。
- ▲校長先生や教頭先生が来てくれて嬉しかった。もっと色んな先生がきてくれないかな・・・
- ▲準備が遅れてしまい、開始時間が遅れてしまった。
- ▲サービスもわかるけど、ルールだから全員が守らないといけないと思う。
- ▲射的で外したときに、少し笑う人がいて嫌な気持ちになった。

今回はクラスをお客さんとして行いましたが、これを兄弟学級や他学年など色んな人を呼んで楽しんでもらいたいと感じている児童が多く、今までのクラスだけの意識から学校全体へと広がりを持たせるような反省があり、次へつなげる課題となりそうです。

(3) 成果

- 学級会の進め方を理解することができた。
- 理由を明確にして意見が言えるようになった。
- それぞれがめあてを持って行い、それが達成できたときの充実感を味わうことができた。
- 課題を発見し行動する力がついてきた。(チャイム着席や整理整頓ができるようになった。)

クラスの課題に気づくことができなかったクラス
全てのことを先生に言って解決してもらおうとしていたクラス



- ・自分たちで課題を見つけ、解決しようとする姿が見られるようになった。
- ・チャイム着席や整理整頓など、学級会で話し合わなくても改善していき、個々の意識に変化が見られた。

I 研究テーマの設定

【柞津小学校全校研究テーマ】

【昨年度の成果と課題から】
 ~子どもたちはどんなときに「わくわく」するか~
 ○教師の教えやすさではなく、**子どもたちが学びたくなる、考えたくなる單元展開**が子どもたちをわくわくさせる。
 ○先生や友だちがちゃんと話を聴いてくれる**安心できる場**で話したり聴いたりするとわくわくする。
 ○教師が子ども一人ひとりを**温かな眼差し**で観て、子どもを知り成長と共に願い励ますことがわくわくにつながる。
 私たちが、子ども共に成長していく存在であることで、子どもも教師もわくわくする。

自ら考え、かかわり合い、自己の高まりを実感できる子ども
 ~子どもたちが「わくわくする」「のめり込んでいく」姿を求めて~

《教材研究》~單元展開のありかた~

- ・子どもの思い、考えや願い・教師の願い
- ・子どもに付けたい力(何ができる・何が分かる・何を考える)
- ・教師にとっての、子どもにとっての「教材のわくわくポイント」
- ・子どもたちが考えたい(主本的、聴きたい、伝えたい)対話的授業場面
- ・教科の先にある『学ぶことの楽しさ』を感じられる授業

《学級経営》~『聴き合う』を切り口に~

- 『聴き合う』の価値への内発的実感による気づき
 ⇒子どもの心の内から湧いてくる『内発的実感』によってこそ、子どもは変わっていく。
- 『聴き合う』ことの大切さに気づくことによって育つ学級。
 ⇒『聴き合う』を大切にすることで、一人一人の考え、ちがいが大切に思える。認め合える。何でも言える。安心できる。学級が自分の居場所になる。
 学級経営は子どもたちにとっての個への支援としての最たる環境調整である。

《聴き合う》

《子どもを理解する》~子ども一人ひとりをよく観る~

- 教師の温かな眼差し(教師の在り様)⇒子どもの自己肯定感の高まり
 - ・その子の言葉を聴く
 - ・子どもの思い、考えや願いを知る
- ・決めつけて見ない
- ・否定的に見ない
- ・その子を知りたい、分かりたい

【授業者の自己課題、授業改善に向けて】

- ・集団を大雑把に見がち。一人ひとりの児童にもっと寄り添える自分(教師)になりたい。
- ・仲間(人)とかかわり合う中で新たな見方、考え方に出会い、共に成長していける授業を目指したい。
- ・子どもたちの思いや考えを中心にした、子どもたちがのめりこみ「わくわくする授業」をつくりたい。

【児童の実態】

- ・とても素直で学級への愛着があり、だれとでも仲良くし助け合うことができる。
- ・自分の思いを表現したい、伝えたいという願いをもち始めている児童。
- ・他者の立場に立てず自分本位に考えてしまったり、思いを行動に移せなかったりする

【特別活動研究テーマ】

集団の課題に対して一人ひとりが自分の思いや考えを進んで伝え合い、聴き合える子ども
 ~新たな価値に気づいたり、共に思いや考えを深めたりする子どもたちの育成~

【特別活動部会(学級活動)の重点】

- ①子ども個々の記録を残し、その事実をつないで個の理解に努め、個への願いを持ち、個の成長と集団の向上の両面をねらい、子どもたちの興味・関心、生活につながる必要感のある議題(題材)の設定をする。
- ②ソーシャルスキルトレーニング(SST)を通して、相手(他者)意識を高め、自分の考えの伝え方を学んだり、お互いの思いや考えを聴き合ったりして、思いに触れたりすることのできる集団づくりを目指し、相手を尊重しつつも、言いたいことをしっかりと伝える力、聴き合う力をつける。
- ③安心して個の考えを出せる関係作り『出し合う』⇒それぞれの考えの違いを相手を否定せず比較し伝える『比べ合う』⇒折り合いをつけながら、全体としての合意形成をする『まとめる』のサイクルを繰り返し、お互いの思いや考えを伝え合う学級会に慣れ、みなが話し合い決定していく良さを実感できるようにする。
- ④子どもたちの意思を尊重し、話し合いを見守り、どこで支援助言をするか担任の出番を見極める。

【学級活動を通して目指す子どもの姿】

- ・互いの考えを伝え合う、聴き合うことのよさを実感でき、「伝え合う・聴き合う」を実践していく子ども
- ・自分の気持ちに折り合いをつけながら、集団の合意形成に関わり、学級への所属意識を高めていく子ども
- ・友との関わりを通しての自己の変化、高まり、新たな価値への気づきを実感できる子ども
- ・自分たちの生活の諸問題や願いを自分たちで解決していく意欲が高まる子ども

II 研究の内容

○本研究グループの授業構想の基本的な考えと、願う児童の高まりの姿

特別活動の学級活動における話し合いの場面では、他の教科授業と比べて、自分たちの生活をよりよくしたり、自分たちの願いを実現したりする「生活への願い」がこめられる場面が多い。児童の生活そのものに関わる題材（議題）では、一人ひとりの思いや願い、こだわりが表れやすい。

そこで、

①児童一人ひとりをよく観て

個の理解に努め実態をつかみ、教師が個への願いをもつことを授業づくりの中心に据える。

②個や学級の願い・実態にぴったりの、子どもたちが今考えたい「わくわくする題材（議題）」は何かを児童と共に吟味し、設定する。

③吟味した題材の中で、お互いが安心して自分の思いや考えを伝え合えるにはどうあったらよいか、SSTや実際の話し合いを通して、「伝え方・聴き方」を学び実践していく。教師は話し合いのどの場面で支援・助言をするかを見極める眼を磨く。

そのような場面、実践をくり返していくことで、自分たちが話し合ったことが生活に反映される場面を体験し、次第に自分たちの思いや考えを「伝え合い・聴き合う」ことのよさを実感していくだろう。

(=内発的実感)

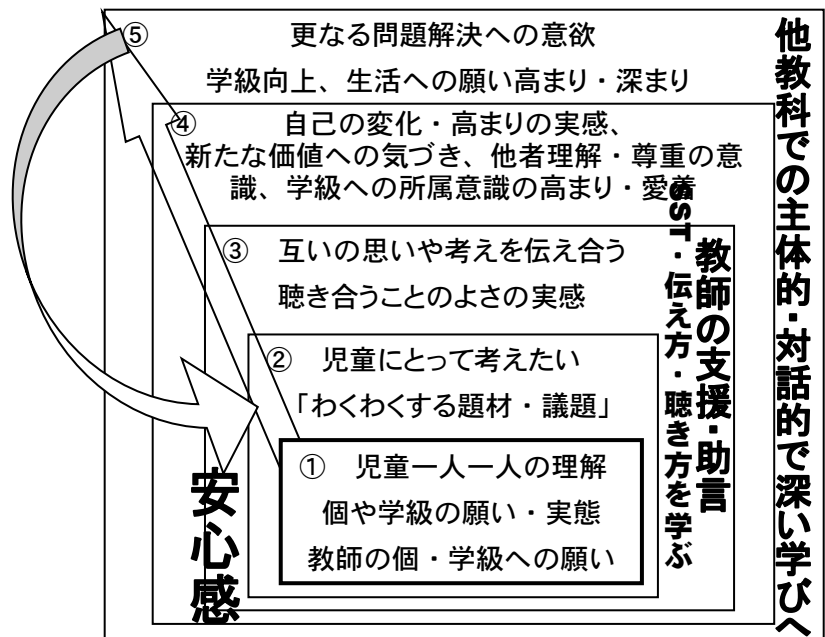
そして、

④自分にはなかった他者の考えに触れたり、自分の考えが他者に認められたり、折り合いをつけてよりよい考えを新たに生み出したりする中で、自己の変化・高まりを実感したり、新たな価値に気づいたり、他者をより理解・尊重したりし、そのことによって学級への所属意識が高まり、安心感がさらに高まるだろう。

これらのことが、

⑤この仲間で「さらに生活をよりよくしていきたい」、「様々な学級の課題を解決したい」という意欲の高まりにつながっていくだろう。

このような学びをくり返すことが他教科での「主体的・対話的で深い学び」につながる「学ぶ集団としての学級力・個力」を高めていくことにつながるだろうと考え実践を重ねていく。



Ⅲ学習指導案

1 題材名

学級活動（1）学級や学校における生活づくりへの参画—ウ 学校における多様な集団の生活の向上
「1年生ともっと仲良くなろう大作戦！～9月の交流に向けて交流内容を決めよう～」

2 子どもの姿から

本学級は男女ともに仲が良く、どんな活動でも協力して行うことができる。新年度準備や児童総会、運動会を経て、最高学年としての自覚が芽生え、さまざまな活動では中心となって活動する努力をしている。

授業では昨年度よりも挙手をする児童が増え、自分の考えを伝えるようになってきた。しかし、自分事としてとらえられないと、意見を出したり、話し合いに参加したりすることができない児童もいる。また、自分が大事だと思うことを授業で発言したり、ワークシートに書いたりすることはできるが、それを実際に行動に移すことができない児童もいる。

今年度は1年2組と兄弟学級となり、4月から行事を通しての関わりが多くあった。休み時間には学級で半数の児童は両教室を行き来して、自発的に交流をしている。1年生と遊んだり、話したりする時間は6年の児童にとっても楽しい時間となっているようで、交流の時間を楽しみにしている児童が多い。

3 題材のもつ価値

自分がやりたいことを優先してしまう児童や、自分で活動を計画し、進めることに消極的な児童もいる。1年生という年下の子どもたちとの継続的な交流は、相手を思いやって活動を計画することや、自発的に行動するよさに気付くことにつながり、そのための話し合いは児童にとって「わくわくする」題材となると考えた。

4月初、1年生と交流できることが分かったとき、子どもたちの願いは「1年生と仲良くなりたい」「楽しく遊びたい」というものが多かった。しかし、交流を重ねていく中で、「遊ぶこと・内容」が大事なのではなく、「1年生と自分がどんな風に関わるか」「1年生と話すことが楽しい」という新たな価値に気付き始めた児童がいる。それをふまえ、今後の交流内容を考えたり、交流会や普段の関わりで、1年生に自分がどう関われば楽しんでもらえるかを行動で表したりすることができるようになっていくのではないかと考えた。

特別活動で願う子どもの姿（言葉・動作・表情）

- ・生活上の課題に対して、進んで話し合いに参加し、友達と聴き合える安心感を持って自分の思いを基に考えを伝え合うことができる。友達の考えを聴くことで、考えを深め合ったり広げ合ったりすることができる。
- ・学級会の司会を子どもたちが経験する中で、友達の意見を整理し、折り合いをつけるためのよりよい方法をみんなで考えることができる。
- ・学級会の「出し合う→くらべ合う→まとめる」の流れに沿って進めることができる。また、活動後のふり返りでは改善点を出し合い、それを基に次の計画を考えることができる。
- ・1年生との交流やこの学級会を積み重ねていく中で、交流内容や遊びなど直接的な「楽しさ」だけでなく、相手を思いやり、気遣った行動を取ることが「楽しさ」につながることに気付くことができる。

今年度、本学級では「個を見つめる」対象の児童を2名設定した。この児童を中心にした活動展開を考えることで、対象児童にとっても学級全体にとっても「わくわくする」話し合いになると考えた。本学級の『個を見つめる』対象の児童

S ・ N 児 男 子	<p>【生活面】</p> <p>友達や身近な大人を気遣う面も多く見られるが、突発的に心ない行動をとってしまうことや友達を傷つける言葉を言ったり、殴ったり蹴ったりしてしまうことがあり、トラブルになることが多い。昨年度よりも友達に手を出すことは減っているが、突発的に暴言を吐いてしまうことが少なからずある。</p> <p>【学習面】</p> <p>興味のある学習に対しては積極的に参加し、完成までくり返し努力することができる。しかし、興味のないものには集中が続かず寝てしまう。友達と協力する場面でも参加しなくなってしまう。</p>
----------------------------	---

H ・ N 児 女子	<p>【生活面】 自分から人と関わることが難しい。ほめられると嬉しそうにしたり、面白い話には一緒に笑ったりと、友達の前でも表情が豊かになってきた。教師が活動に参加させようとすると、全身で拒否することも多いが、クラスの仲間が「一緒にやろう」と声をかけると抵抗なく参加するようになった。しかし、自分からは一切関わりを持たずとしないため、活動に参加しないこともよくある。 係活動や児童会活動には積極的に、責任感を持ってやり遂げることができる。</p> <p>【学習面】 行動が遅く、集中も続きにくいので、ノートをとるので精一杯だが、最後まで書こうとするようになった。納得いく字を書けるまで何度も書き直すことも多い。グループ学習では、自分の考えをもてる時間があれば、自分の意見を伝えることができる。今年度は言葉で伝えようとしている。</p>
----------------------------	--

4 今までの学級会について

これまで学級会（話し合い活動）の経験があまりに少なかったため、今年度は①修学旅行の班決め ②1年生との交流に向けての2つの題材で学級会を行ってきた。

題材① 修学旅行の班決め

今まで本学級では、教室の座席や班決めは視力・学力を考慮し、教師が決めていた。なので、児童は「当然修学旅行の班も先生が決めるのだろう。」と思ったのか、先月ぐらいから修学旅行の班に関する質問や要望が児童から出ていた。しかし、今回は初めて児童にゆだねた班作りを行うことにした。

初めの時間、教師から《決まっていること・譲れないこと》として、修学旅行の班が①行動班 ②宿舎班 ③アトラクション班の3つであること、班の人数、係の人数を説明した。

そして司会経験のない子どもたちのため、名簿番号順に3人ずつ、司会・記録を経験する機会にした。

本題材における教師の願い	
学級全体	修学旅行に関する話題は、より自分事として捉えやすいと考えられる。その中で、自分が修学旅行の班決めに対しての願いを一人ひとりがもってのぞんでほしい。また、周りの意見と異なっても臆することなく発言してほしい。同じチームの仲間として、グループ分けをする中で周りの友達を大切に考え、さまざまな立場・友人関係がある仲間を思いやった発言が増えてほしい。
S・N児	誰かとペアやグループを組むとき、常に「（誰と一緒にしても仲良くできるので）だれとでもいい」という立場でいることが多い。なので、今回もそのように考える場合、どうしてそう考えるのかを発言してほしい。もし、それ以外の考えが思いついたときには、自分の思いを進んで発言してほしい。また、他の友達の見解を聴き、それに対して反応を示すか、賛成・反対意見を出してほしい。
H・N	「どうでもいい」という無関心な立場ではなく、クラスの仲間との関わりが苦手だからこそ、自分事として、自分が「こうしたい」という思いや考えをもってほしい。友達の見解をよく聞き、積極的に発言できなくても頷いたり、首をふったりすることで反応を示し、話し合いに参加してほしい。

(1) 話し合いの展開

第1回 7月5日(金)【どうやって班を決めるか① 出し合う・くらべ合う】

はじめは「係から決めて、班を作る」「高原学習や今までの班であまり一緒になったことがない人から組む」「男女別にする」「1・2組合同で班を作る」など、さまざまな意見が出た。

しかし、A・M児の「混乱が起きるかも知れないが、修学旅行は楽しみたいから自由な人と組みたい。」という一言から、「自由がいい」という意見に変わった児童が次々出るようになった。

結論は出ず、多数決を取って上位2つの「自由」「係から決める」の意見から、次回決めることにした。

出し合う	理由
自由	思い出に残る修学旅行にしたいから。仲良くないと話が盛り上がらない。楽しく話ができる。 小学校の仲間と最後の旅行だから。今までの学習の旅行と違って学習より楽しむものだから。
係から	班長がしっかりした人だとまとまるから。自由な人から決めると係決めにもめてしまうから。 自由じゃなくても、協力や助け合えるから。このクラスは誰となっても仲良くできるから。 自分が最後までできる、ふさわしい係をよく考えてやればいい。
同じ班になったことのない人同士から	関わりがなかった人とも仲良くなれるきっかけになる。協力し合って仲良くなる。 同じ班になったことがなくてもきっと楽しめる。
男女別	自由な人と楽しく組めるから。男子同士なら楽しい。
1・2組合同	クラス関係なく楽しく過ごせる。やってみたい。

第2回 7月9日(水)【どうやって班を決めるか② くらべ合う】

「自由」の意見の児童が、具体的にどうやって「自由に」決めるのか、案を出し合った。それから、自分が「自由」「係から」のどちらか、それぞれの意見をくらべ合うことにした。

	自由	係
出し合う (追加)	<ul style="list-style-type: none"> ・男女の人数は関係なく組む。男女の人数を決めて集める。 ・組める人数を決めて、なりたい人同士で集まって決める。 	
くらべ合う	<ul style="list-style-type: none"> ・係から決めて、旅行が楽しくなるのか。 ・自分がなりたい係を希望して、なれなかったら残念な気持ちになる。 ・しっかり話し合えば、友達同士でもちゃんと係の仕事ができる。 ・余った人は誰かに入れてもらえばいい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・好きな人となれた人・なれなかった人が出てしまうと楽しくない。かなしい。 ・自由じゃなくても誰とでも仲良くなれる。 ・好きに組んだ人の中に、<u>組めなくて余った人がいても楽しめるのか?</u> ★自由な人とふざける人も出てくる。

「余った人」という言葉について、児童と考えた。発言に言葉の配慮の必要性を学ぶきっかけとなった。

係派の T. M 児は「好きに組んだ人の中に、組めなくて余った人がいても楽しめるのか?」という質問に「クラスみんな友達だからそんなことはない。」と自由派 Z.A. 児が答えた。それに対して、B.H 児が「余った人と仲良くできるんだったら、係から決めたっていいはず。」と言うと、自由派の児童は反論できなかった。

すると H. N 児がおそろおそろ手を挙げ、「★自由な人とふざける人も出てくる。」と発言すると、それに続いて T.T 児が「ふざけてしまうくらいなら、しっかりと係から決めるべき」と発言した。その後、係活動(特に班長)の必要性を訴える児童が出てくるようになった。

最終決定を出す場面で、全員が黙ってしまったので、教師から《譲れないこと》の再確認をした。

そうすると、ずっと自由を主張していた S.S 児から「宿舎・アトラクション班が自由であればいいんじゃない?」と意見が出た。そこから再び係活動・班行動の必要性が話題に上がるようになった。

まとめる	<ul style="list-style-type: none"> ・修学旅行の班は3つある。行動班は勉強するところだから、自由は必要ない。 ・係活動が必要になることが行動班だから、係からしっかり決めた方がいい。 ・その代わりに宿舎・アトラクション班では楽しむために、自由に決めたい。
------	--

第3回 7月10日(水)【班を決めよう】

第一回に K. T 児から出た「自分が最後までできる、ふさわしい係をよく考えてやればいい。」の発言をもとに、全員が自分の係を決め、選択した。決定に時間がかかったので班決めは、夏休み明けとなった。

(2) 本題材での「個を見つめる」対象児童の様子

学級活動	S.N 児	H.N 児
7月5日 学級会での様子	話し合いをじっと聞いている。	発言する人をちらりと見て、時々聞いているが、手いじりが多く、興味が無い。
出し合う	・1・2組混ぜた班がいい。やったことがないし、クラスは関係なく楽しめる。	・(問いかけに対して) べつになにもない。
くらべ合う	・自由がいい。普段あまり関わらない人とだと、話が盛り上がらないから。	(発言・反応なし。)
7月9日 学級会での様子	机に伏してだらだらとしている。時々顔を挙げて話を聞いてはいる。	初めは、前回同様に興味がなさそうだったが、「自由」に対する反対意見が出た頃、顔が上がり、反応を示した。
出し合う	(発言なし。)	・(前述☆の問いかけに対して) 強く首を振る。
くらべ合う	(授業後聞くと) ・べつにどちらでもいいです。	・自由な人といると、ふざける人が出るから係から決めた方がいい。
まとめる	・あまり反応がない。	・顔を上げて決定をじっと聞いていた。
7月10日 班決めの様子	・頼杖をついて半分寝ている。今まで行事の度に何かとすぐ班長を希望していた。しかし、「自分が最後までできる、ふさわしい係」にはまらないと考えたのか、めずらしく学習係を希望した。	・希望の係に挙手をせず、司会が聞くと「なんでもいい」といい、選ばなかった。そこで、教師から「みんな、「自分がふさわしいと思う係」を選んでいから、考えてみよう」というと、5分ほど悩み、しぶしぶ学習係を選んだ。

【この題材から分かったこと】

・児童は自分事になりやすい題材であると、活発に自分の意見を主張する。「誰となってもいい。」や「係の仕事が大事だ」と考える児童は、「自由」という「誰かが困ってしまう・悲しい思いをする」状況を予測し、反対意見を主張していた。学級会というより、学級討論会のような場面もあったが、子どもたちが自分の率直な意見を出すことができていた。

・一切発言のなかった児童数名に「どんなことを考えていたか」を尋ねた。すると中には、中立的な意見を持っており、今回の話し合いの意見が「自由」と「係」の両極になってしまったので、中立的な意見が言いにくかった児童もいたようだ。「どちらでもよい」その理由を学級会で発信することが、クラスのみんなが参加する、活発な意見交換ができる学級会となるということを伝えた。

【「個をみつめる」対象児童の様子】

・N.S児は、「楽しいから」と「1・2組合同」や「自由」という意見を主張したが、他の児童の発言を聞くうちに、一切発言をしなくなった。本人は最終的には「どちらでもいい」という立場になったため、発言しなかったのだという。興味が無いこと（1年生との交流に向けた学級会では、交流内容を決定する場面）には、全く学級会に参加する姿勢を見せない。しかし、興味があり、自分の考えが持てること（ルールを決定する場面）に対しては率先して参加したり、友達の意見を汲んで発言したりすることができる。N.S児にとっては、修学旅行の方が「自分事」としてとらえ、参加するかと思っただけで、そうではなかった。

・N.H児は、よく係や委員会決めで「どうでもいい」「なんでもいい」と言うことが多い。今回もずっと興味を示さないだろうと思っただけで、「好きに組んだ人の中に、組めなかった人がいても楽しめるのか？」という発言に対して、強く首を振った。それは修学旅行に関する学級会での初めて反応だった。クラスでは一人であることの多いH児が、「好きに組んだ人」の中に入れられる「組めなかった自分」を想像したのだと思う。彼女にとってはその場面が一番「自分事」としてとらえられた瞬間だったように思う。

題材② 1年生との交流にむけて 【これまでの活動・経緯】

(1) 活動の展開

交流を進めるにあたり、話し合い活動（計画）→実践（交流）→ふり返りをくり返し積み重ねてきた。

	活動過程	活動内容
これまでの活動の経緯	①願いの共有 議題の発見・決定	5月27日 ○1年生とどんな風になりたいかを考え、発表しよう。 ○1年生と交流の計画を立てよう。
	②話し合い活動	6月4日 ○交流の時間にどんな遊びをしたいか話し合おう。 ○26個も意見が出たが、どうやって決めよう。 →今回は1年生にアンケートを取って決めてみよう。
		6月12日 ○「けいドロ」をどんなルールにしたらいだろうか。
	③実践	6月13日 ○けいドロ 場所：校庭 警察（鬼）：6年男子4人
	④ふり返り	6月14日 ○よかったこと・もっとこうすればよかったこと（反省）を、1年生・6年生の様子から出し合おう。 ○1年生はどんな感想を持っていたらう。
	⑤願いの共有 ⑥話し合い活動	6月24日 (2時間) ○2回目の交流に向けて、前回の振り返りを生かして、どんな遊びにしたらいだろうか。 ○交流で「大事にしたいこと」を決めてから、遊びを決めよう。 ○たくさん意見の中からどうやって絞り込もう。 →ここまで出し合って比べ合ったので、多数決にしよう。
	⑦話し合い活動	7月17日 ○1年生もできるようなルールを決めよう。 ○前回の反省を生かして、司会や進行を決めよう。
	⑧実践	7月18日 ○手つなぎフルーツバスケット 場所：プレイルーム
	⑨ふり返り	7月22日 ○よかったこと・もっとこうすればよかったこと（反省）を、1年生・6年生の様子から出し合おう。 ○1年生にとったアンケートを読んで、1年生の願いを知ろう。 ○第3回に向けて、どんな交流を試みたいだろうか。
事前の準備	⑩活動全体のふり返り 議題の発見・決定	8月23日 ○今後の交流に向けて、「楽しい」について改めて考えてみよう。 ○自分たちが1年生にしてあげられることはなんだろう。
	⑪遊びの調査・体験	8月28日 (29日) ○これからの交流でできそうな遊びを調べよう。 ○実際に遊びを体験して、ルールを知ろう。
	⑫提案・体験	9月3日 ○次回の交流で「楽しい交流のために」に当てはまる遊びを提案するため、短冊に書いてみよう。提案の理由を考えよう。

本時	⑬話し合い活動	9月5日	○1年生も6年生も「楽しい」交流内容を決めよう。 ○次回の交流に向けて、自分のめあてをもとう。 ※詳細は本時案参照
事後	⑭⑮話し合い活動	9月9日 9月10日	○それぞれの遊びのルールを決めよう。 ○当日の進行を決めよう。○司会を決めよう。
	⑯実践	9月11日	○(交流内容は本時で決定) 場所: 体育館入口側
	⑰ふり返り	9月12日	○「楽しい交流のために」の達成度をふり返ろう ○1年生の様子・6年生の行動を基にふり返ろう。

(2) 子どもたちの発言・感想から、1年生からの感想

交流日	第一回6月13日 朝の時間	第二回7月18日 朝の時間	
交流内容	けいさつとドロボウ(校庭)	手つなぎフルーツバスケット	
子どもたちの発言・感想	交流前	<ul style="list-style-type: none"> ・1年生を迎える会で関わりができた。 ・学級ペアの子と仲良くなりたい。 ・一緒に楽しく遊んでみたい。・きずなを深めたい。 ・1年生と仲良くなりたい。・親しくなりたい。 ・話ができるようになりたい。 ・休み時間も遊べるようになりたい。 ・あまり話せない人とも仲良くなりたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1年生・6年生みんなが楽しめて、笑顔でいられるものがいい。 ・1年生が困ったら助ける。 ・1年生と6年生がペアになったほうがいい。 ・ルールを分かりやすくしたい。 ・司会を決めて、スムーズに進めるようにしたい。 ・遊ぶ時間をたっぷりとりたい。
	遊び・ルール決め	<ul style="list-style-type: none"> ・やりたい遊びがたくさんある。 ・とにかく楽しく遊びたい。 ・1年生がけがのないようにしたい。 ・ルールはしっかり決めよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的なペアは1年生と6年生とで組む。でも1年生同士のペアは1組できていい。 ・お題に困ったら6年生が助けてあげる。 ・安全を考えて、走り回らない。
	交流後	<ul style="list-style-type: none"> ・1年生に手加減した6年生がいて良かった。 ・けががなくてよかった。 ・ルールを守った人と守れていない人がいる。 ・1年生と交流ができなかった。 ・楽しかったけど、1年生とはあまり遊べなかった。 ・つまらなそうにしていた子がいた。 ・1年生が一緒だとスムーズには進まない。 ・交流を進める人がいなかったから遊ぶ時間が少なかった。 ・1年生がルールを分かっていたいなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1年生と空いた時間に話せて楽しかった。 ・お題のことを1年生と話せた。 ・自分から声をかけたり、優しく肩をたたいたりしてペアを組めた。 ・前回よりもさらに楽しそうだった。 ・1年生が「またやりたい」と言ってくれた。 ・司会が1年生を助けていたけれど任せきりになってしまった。次は自分たちも困っている人を助けてたい。・ペアと一緒にいても何もしない人がいた。 ・ルールが難しい。 ・実際にやってみないとルールが分からない。
1年生の感想	良かったこと	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しかった。・面白かった。 ・遊んでいる時間が楽しかった。 ・つまらなかつたから嬉しい。 ・もう一回けいドロボウがやりたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・色々な6年生とペアになれて良かった。 ・楽しかった。・他のゲームもやりたい。 ・やったことがなくて面白い。 ・「～好き？」と聞いてくれて楽しかった。 ・友達の好きなものが分かった。
	こうしてほしいこと	<ul style="list-style-type: none"> ・女の子の警察(鬼)を増やしてほしい。 ・本気で追いかけてほしい。 ・鬼を増やしてほしい。・優しくタッチしてほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・お題を考える時間がほしい。 ・運が悪いから(何度も鬼になった)。 ・ルールが難しい。

(3) 「個をみつめる」対象児童への記録・願い

学級活動	S.N児	H.N児
5月27日 交流に向けて	遊びの案を2・3個書くが、話し合いにあまり興味を示さず寝てしまった。	一生懸命1年生との交流手段を考え、「お絵かき」と書き発表した。
6月4日 交流内容の決定	班の友達の見解に反応し、「ペアでできるからそっちの方がいい」と賛成した。	校庭での交流だが、お絵かきの案について「1年生が楽しいから。」と主張した。
6月12日 ルール決め	今までで一番やる気を見せた。「1年生を思えば」とくり返し訴え、沢山ルールを提案した。	欠席
6月13日 第一回交流(けいドロ)	1年生の肩をかかえて移動したり、自分を叩く子にも怒らなかつたりと、とても優しく関わっていた。鬼になったが、手加減をして追いかけていた。	校庭まではペア児童の近くで寄り添うようにして動いていた。しかし、けいドロ中は校庭の端から一步も動かなかつた。
6月14日 交流のふり返り	「初めての子と仲良くなれた。」と感想を書くが、話し合いには参加しなかつた。「鬼が手加減して良かった」という発言には反応し、頷いていた。	少し考えてから「私はとくに何もしていないから何かすれば良かったと思う。」と書いた。友達の見解をじっと聞いていた。

<p>6月24日 事前公開 次回の交流 にむけて (2時間)</p>	<p>たくさんの先生方が見ていたにもかかわらず寝ていた。やはり彼にとっては交流の内容はワクワクする話し合いではないようだ。</p>	<p>ハンカチ落とし・爆弾ゲームと書いた。今までの提案とは違っていた。次回のめあてを「みんなで楽しくできるようにしたい。」「1年生が楽しくできるようにする。」と書いた。「喜んでほしい・楽しんでほしい」という願いは4月から変わっていないようだ。</p>
<p>7月17日 ルール決め</p>	<p>ルールを決めるとなると前回の交流の計画同様に生き生きと話し合いに参加する様子がみられた。今回は「安全」「けがのないこと」を大事だと発表していた。また、「進行をきちんとやること」も必要だと訴えていた。</p>	<p>遊びについてのルールに「何を言うか思い浮かばない子がいた場合、ちょっと手助けしてあげる。」「手をつないでいない子がいたら教えてあげる。」と書いた。具体的な場面を思い浮かべているのは初めてであった。ぜひ実行してほしい。</p>
<p>7月18日 第二回交流 (手つなぎ フルーツバ スケット)</p>	<p>1年生と移動中に楽しく話す姿が見られた。交流中も「みんな集まれ～」「ペア組むぞ！一緒に組もう！」と全体やそれぞれの1年生に話しかける様子があった。 ペアになったり、近くで関わったりした1年生はとても楽しそうに笑っていた。</p>	<p>学級ペアの1年生と距離ができ、話さない。 いざ交流が始まると、中心に集まった後残ってしまう。お題を出す番でも、1年生と距離を詰めることもなく、ただ立っていた。その後他の6年生の助けを借りてやっとペアを組んでいた。終始うつむいたままだった。</p>
<p>7月22日 交流の ふり返り</p>	<p>「1年生にたくさん声かけられた。楽しく会話できた。たくさんの1年生とペアになって楽しかった。」と書いた。4月に比べ、自分から1年生と積極的に関わり、気を配って優しく接していることを自覚しているように見える。</p>	<p>「ルールは1年生にとっては理解できなかった。」「何もできなかった。」「1年生も色々困っていたかもしれない。」などと書いた。おそらく、自分の困り感も、1年生を困らせてしまったことも分かっているようだ。 ※H児の学級ペアの児童は「ペアじゃない人とがいい」とふり返りに書いていた。</p>
<p>8月23日 交流に 向けて 「楽しい」 の観点</p>	<p>自分でじっくり考え、ワークシートに「1年生に、質問や得意とすることを言ったり、会話を広める。」と書いていた。発表の時間は友達の意見に耳を傾けていたが、「1年生と話をする」という友達の意見に付け足しとして「6年生から話しかけるのがいい。」と発言した。 自分ができることとして「気を配る。ヒマにさせない。」と書いた。前回は意識せずできていたことだが、意識して交流をしたとき、1年生に対してどんな行動をとるか見ていきたい。</p>	<p>すぐに書き始めた。「いっしょに仲良く遊んでいるとき」が1年生が楽しいときだと書いた。6年生ができることとして「困っていたら助けてあげる。」と書いた。これは前回のふり返りから反映されているようにも思う。 そして自分ができそうなこととして「ルールを1年が分かりやすいようにする。」と書いた。遊びを考える時に、H児なりに具体的な遊びを見つけるきっかけになってほしい。</p>

(4) 本活動で願う「個を見つめる」対象児童の姿

S・N児	<p>・1年生との関わりを通して、他人を思いやることのよさに気付いてほしい。話し合いの活動では、1年生を思いやった発言が出始めている。その思いを基に、自分の考えを友達に伝えるなどして活発に話し合いに参加してほしい。話し合いに興味を持たず、進んで参加できないこともある。</p> <p>今まで行動に表すことが難しい面があったが、交流のときに1年生に優しく話しかけたり、一緒に遊んだり、交流で困っている子の手を引いたり、1年生を気遣った行動が表れるようになってきたので、これからも自分の思いを行動に移すことができしてほしい。</p>
H・N児	<p>1年生が教室に来るとしきりに気にしているものの、自分から関わろうとはしないが、楽しそうである。発言をすることは難しいが、自分の思いを端的に書くことができる。1年生のための遊びやルールを考えられるようになってきている。一人一人が言う（言わざるを得ない）ときやグループ活動で聞かれたときには発言できるようになってきた。本活動では、発言やうなずきをするだけでも話し合いに参加としたい。</p> <p>今までの交流では1年生と関わろうとはせず、遠くで見ていたり、ペアになれなかったりと積極的に関わることができなかった。H児自身、1年生との交流で自分がうまく関わることができないことを自覚しているので、これからの交流では、自分から一瞬でもいいので優しく関わろうとする姿がみられるようになってほしい。</p>

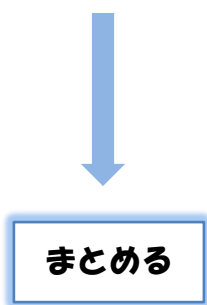
5 主眼

2回あった交流会のふり返りから、「楽しい」とは、「遊びの楽しさ」だけでなく、自分たち6年生が1年生に対して話しかけたり、色々な1年生・6年生と遊んだりするなどといった、自分たちの関わり方が楽しさにつながることに気付いた子どもたちが、交流会に向けた遊びについて話し合う場面で、「楽しい交流のために」を大事に考えて提案された遊びについて、お互いの思いや願いを聴いたり、賛成や反対意見を出し合ったりすることを通して、関わり合いが増え、みんなが楽しめる交流内容を決めることができる。

6 展開

- ・司会の児童が中心となって話し合いを進めていく。（全員が体験するため、現在も名簿順で回している。）
- ・教師は聴いている側の一人として参加し、必要に応じて助言をしていく。

段階	学習活動	○子どもの活動 ◎評価	指導上の留意点・支援	時間
導入 展開	1 議題を確認する 司会児童 3人 K.Y児(男子) R.Y児(女子) K.Y児(男子) 2 決定事項を確認・共有する 3 話し合う	[議題] 1年生も6年生も「楽しい」交流内容を決めよう ・日時 9月11日(水) 朝の時間と1時間目 (8:30~9:35) ・場所 体育館半分(入口側) ・遊びは3つまで ○交流内容を決める (1) 交流内容を決めるときに大事な こととして前時に出し合った「楽しい 交流のために」を再確認する。	・今までの話し合いの模造紙 黒板、交流している様子の写 真、前時で決定した「楽しい 交流のために」を児童が見ら れる場所に貼り出す。いつで も児童が読めるようにして おく。 ・みんなで考えた「楽しい交 流のために」を司会が読み返 し、全員が共通の意識を持っ	3 27
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【楽しい交流のために】</p> <p>内容①たくさんふれあえる遊び ②協力してできる遊び ③いろんな人がいろんな役割ができる遊び ④わかりやすく、簡単な遊び ⑤1年生がやったことがなさそうな遊び</p> <p>行動⑥積極的に6年生が1年生に話しかけること(好きなこと・名前) ⑦ひまな時間を作らない</p> <p>★いつでも、心配りをして困っていたら優しく助けてあげる。</p> </div>			
	<div style="text-align: center;"> <div style="border: 1px solid blue; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">出し合う</div> <div style="font-size: 2em; color: blue; margin: 10px auto;">↓</div> <div style="border: 1px solid blue; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">くらべ合う</div> <div style="font-size: 2em; color: blue; margin: 10px auto;">↓</div> </div>	<p>(2) 遊びを提案する。 短冊に書いた遊び、それを提案する理由を番号と詳しい理由を挙げて提案する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・木とリスがいい。ルールを簡単にしていればいい。いろんなペアにもなれて、困ったら近くの6年生が助けられるから。 ・名前を使った遊びができないかな。 ・手つなぎ鬼。手をつないでできて、いろんな人と関われるから。 ・体育館は広いけれど、1組が一緒だから、あまり広がらない遊びがいいな。 ・私も○○さんと同じ遊びです。1年生と一緒にできるからいいと思います。 ・体育館にはボールがあるので、ペアでボールを使った○○という遊びがいいと思います。 <p>(3) 出た案を検討する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・木とリスは、難しそうだけど楽しいので、簡単にできるならやってもいいと思う。 ・簡単にするってどう簡単にするのか？ ・ハンカチ落としは、1年生と関わることが少ないと思うので反対です。 ・手つなぎ鬼は、ペアが変わるからいろんな1年生と仲良くなれそうなので賛成です。 ・だるまさんシリーズはペアが変わらなかつたり、ペアになれなかつたりするので反対です。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童はそれぞれ、自分たちで調べ、体験した遊びから案を決め、短冊に書いている。 ・短冊を司会の児童が同じ遊びや近い遊びごとに貼っていく。該当する番号を正の字で書き出す。 ・同じ遊びの意見がある場合は、その意見につなげて発言できるように、司会児童と打ち合わせをしておく。発言する児童たちにも、同じ意見は続けて出し、自分の理由をつけて出していくように声をかける。 ・短冊がまだ手元にあり、発言していない場合の児童には教師が直接声をかけたり、司会から当てたりして、全員が意見を出すことができるようにする。 <ul style="list-style-type: none"> ・出ている案に対し、賛成や反対意見、質問を出し合い、出た意見を比べ合う。 ・賛成意見・反対意見が出たものに関しては、理由を細かく書かず、正の字で書き、一目で見分かりやすいようにする。そして、黒板を後で読むよりも、友達の意見をよく聴くことを大切にする。 	

	 <p style="text-align: center;">まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・走るのが苦手な1年生がいると思うので、〇〇がいいと思います。 ・前は座ることが多かったので、たくさん動く遊びがいいと思います。 ・全部走るやつだとつらいから、決めるときには1つくらい座っている遊びでもいいと思う。 <p>(4) 交流の内容を決定する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今回は3つ選べるから、賛成意見が多いやつから選べばいいんじゃないかな。 ・今のだと多すぎるから、多数決を取っていくつか減らしてみたらどう？ ・どれになっても楽しそう。 ・前回できなかったものができるといいな。今回できなかったものは、これからの交流でやってみたらいいんじゃないかな。 ・〇〇という遊びは①と③の理由が多いからいいと思う。 ・じゃあ、②と⑤の理由が多い〇〇という遊びもセットにしたらいんじゃない。 ・走る遊びばかりだから、座れる遊びもあった方がいいよ。 ・体を動かさなくても、～という遊びならたくさん話ができるから楽しいと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「くらべる」で挙げられた賛成・反対の意見を十分に考慮して決めるように、司会（または教師）から声をかける。 ・司会の進め方、「まとめ」時の最終決定の仕方に関して、事前に学級で取り扱っておく。 ・多くの理由が出たから良い、のではなく、「楽しい交流のために」を大切に考えられた案であることや・3つの交流のバランスなどを考慮した決定となると良い。 子どもたちから出た意見を尊重して、助言をしていく。 	5
終末	<p>4 ふり返しをする</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○決まったことを確認する。 ・決定した遊びは～、～、～です。 ○次回の交流に向けてめあてを書く。 ・もっと自分から1年生に声をかけていきたい。 ・1年生と手をつなぐようにする。 ・楽しんでもらえるように、自分から動いているんな1年生と遊ぶ。 ・困っている人がいたら助けてあげたい。 <ul style="list-style-type: none"> ○自分なりのめあてを発表する。 ○次回の学級会の議題を確認する。 「それぞれの遊びのルールを決めよう」 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>◎掲示されている「楽しい交流のために」や前回の自分のふり返し、掲示してある振り返りを基にして、自分のめあてを考え、書いているか。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・時間のある限り指名し、めあてを発表する。 	10

7 「個を見つめる」対象児の予想される反応と教師の支援

段階	学習活動	◆対象児の予想される反応・支援 ◎評価	
		S・N児	H・N児
導入	3 話し合う ○交流内容を決める (1)「楽しい交流のために」を再確認する。 (2)遊びを提案する。	◆短冊を持つことで、話し合いに参加すると予想される。しかし、発表した後、無関心にならないように、友達の意見に意識が向くように教師から声をかける。	◆短冊を持ったまま発言しないときには近くに行き、発言を促す。また、同じ意見を持った友達に続けて発言するように声をかける。発言を拒否した場合は教師が挙手をし、一緒に発言する。
展開	(3) 出た案を検討する。 (4) 交流の内容を決定する。 ○決まったことを確認する。	◆興味なく聞いている様子の時には、声をかけ、いいなと思う案や、自分が反対だと思う案がないのか話しかけ、発言を促してみる。 ◆友達の意見を聞き、自分なりの思いや考えを発言できた時には教師からほめていく。	◆自分から何か一言でも意見を言えた時にはほめていく。また、友達の意見に対して頷いたり、首をかしげたりした時には「今どんなことを考えた？」など、全体の場で発言しなくてもどんな思いがあるのか聞いてみる。全体に発信すべき考えのときには本人と相談し、本人が発言するか、教師が発言するかを決めていく。
終末	4 ふり返しをする ○次回の交流に向けてめあてを書く。 ○自分なりのめあてを発表する。 ○次回の学級会の議題を確認する。	◎前回 1 年生と楽しく過ごせた達成感を感じているので、さらに楽しく過ごせるため、自分はどう行動できそうかを書くことができているか。	◎今までうまく 1 年生と関われなかったことを思い返し、次の交流で自分なりに努力したいことが書くことができているか。
		◆対象児が手を挙げていた場合、司会に当ててみるよう提案する。しかし、本時で何度も発言をしている場合には提案せず、司会にゆだねる。	

【討議の柱①】

- ・互いの考えを伝え合い、聴き合うことの良さを実感できる学級会の場づくりについて。

【討議の柱②】

- ・友との関わりを通しての自己の変化、高まり、新たな価値への気づいていると思われる子どもの姿について。

IV 研究の成果と課題

(1) 教育課程当日の授業までの取り組み

①「個を見つめる」対象児童の設定

今年度、本学級では「個を見つめる」対象の児童を2名設定した。この児童を中心にした活動展開を考えることで、対象児童にとっても学級全体にとっても「わくわくする」話し合いになると考えた。

S・N児(男子)とH・N児(女子)の行動や様子を学級会の時だけでなく、普段の様子をとらえることによって、個の児童への思いや考えを伺うことができたり、自分自身の児童に対する声かけや支援の方法を今まで以上に工夫することができた。また、児童の思いや行動の変容を常に掴むことができたので、伸びた点やもっと「こうなってほしい」と願うことが変わっていった。

②学級会の繰り返し、意見の出し方・聴き方、さまざまな参加の形

今まで学級会を経験したことのない児童であったので、4月から「1年生との交流」「修学旅行に向けての班決め」について、学級会を繰り返し行ってきた。はじめは授業でいつも発言する、一部の児童のみが意見を出す話し合いが続いた。そこで、「CSS」という、学級ソーシャルスキルをつける活動を取り入れ、意見のよりよい伝え方や自分の考えを持つことの大切さ、友達の意見をよく聴くことの必要性について考えることを積み重ねた。すると、CSSや学級会を繰り返すうちに、いろいろな児童が意見を出すようになり、また参加している児童も自然と「聴く」意識がつくようになっていった。

「聴く」ということが自然と身についてくると、発言のできる児童がただ意見を出して終わりではなく、それに対してうなずいたり、質問をしたり、意見に付け足しをするなど、一つの意見から広がる様子も見られるようになっていった。

しかし、そうはいつでも発言が苦手な児童や、自分の意見が持てない児童もいるので、全員がいつも学級会に参加できているわけではなかった。そこで、事前にワークシートに自分の考えを書き出したり、グループで意見交換をしてみたりと、議題に対して、自分の意見をしっかり持って参加することを意識できるようにした。また、意見を貼り出す短冊を用意すると、手元にある自分の意見をなんとか発言しようとする児童がいたが、ずっと出せないままの児童もいた。全員が参加できる学級会にするためには、さまざまな児童に応じた手立てが必要だと強く感じた。

③全員で司会の経験を積む

そして、司会をはじめ教師が行っていたが、児童主体で話し合いを進めるために司会を全員が経験できるように、司会の役割を3人(①進行、②タイムキーパー ③記録)作り、名簿順で回すことにした。また、話し合いの前には司会と教師の4人で集まって『司会計画書』を作り、話し合いのめあてや進め方を相談して、司会がスムーズに進められるようにした。

計画や時間の通りに進まないことがあっても、お互いに相談をしながら学級会を進めていくので、司会の児童も、学級会で意見を出す児童も「自分たちで行う学級会」という意識がついたように感じられた。

④1年生の交流と学級会のサイクル

1年生との交流に関して、【計画・実行・振り返り・次回の計画】というサイクルを大切にしてきた。初めは学級レクのように、自分たちで好きなことが出来る時間であり、遊びたい気持ちばかりが前に出していた。しかし、実際に自分たちで計画し、自分たちで進めることで、「良かったこと」だけでなく、「うまくいかなかったこと・できなかったこと」から「次はこうしたい」と考えることができた。また1年生という年の離れた異学年との交流は、行動面でも体格面でも「うまくいかないこと」が多く見え、次第に、自分たちが楽しむことよりも「1年生を楽しませたい」という方向に気持ちが向かっていった。

また、1年生に交流についてのアンケートをとることで、より児童は1年生のことを思い、交流内容の大切さを考えるきっかけになった。

交流会と反省を繰り返して、次回の計画を立てていく中で、1年生との交流における「楽しさ」についても考えるようになり、本時での学級会では、それを基にした交流内容の提案を行うこととなった。

(2) 当日の授業・子どもの姿から

①「個を見つめる」対象児童の設定

S・N児(男児)は、自分が関わることでも『なんでもいい』『どうでもいい』という態度で、何かを進んでやるのが苦手だった。友達に対しては、突然殴ったり蹴ったりしてしまったり、暴言を吐いてしまったりと人に優しく接することが難しかった。しかし、1年生との交流を繰り返すうち、自分が遊ぶことよりも1年生と一緒に行動することや、1年生が楽しめることを大切に考えている行動をとるようになった。率先して1年生と手をつないだり、遊んだり優しく関わろうとする姿が見られるようになった。人との関わり方は4月よりも変わったことがわかる。以前よりも暴力・暴言のトラブルが激減した。

また、初めの学級会では、手遊びをしたり、寝たりと興味を示すことがなかったが、1年生との交流にむけて話し合いを繰り返すうちに、自分の意見や願いを持ち、自分から発言することや、友達の意見を聞くようになった。「1年生を思えば」と1年生のことを思った発言をするようになった。

今回の公開授業でも発言をすることができた。学級会では積極的に発言する方ではないので、S児の変容を見ることは難しかったが、1年生との交流を通してのS児の姿は、1年生のことを思ったり、優しくしたりと行動で現れるようになった。

N・H児(女児)は今まで話し合いやクラスの活動に全く参加できなかった。1年生との交流を通して、『次の交流ではこうしたい』など、自分の思いを持つことが増えるようになった。1年生との交流にはなかなかなじめず、自分から声をかけたり、手をつないで遊びに誘ったりなど、率先した行動はできないままだが、今回の公開授業でもずっと手を上げて発言するなど、自分から話し合いに参加しようとする意思があった。事前に準備した、遊びを提案する短冊もH児にとっては、話し合いに参加する良い手段であったと考えられる。

S児は学級会よりも交流会で率先して1年生と楽しく関わろうとする姿がより見られ、H児は交流会よりも学級会で前のめりに話し合いに参加する姿が見られた。

特別活動の学級会では、その学級会での発言や参加の様子を見るだけでなく、学級会と交流会の両方の姿を通してみることで、児童の成長・変容が分かるのだと感じた。

②1時間でまとめる学級会

「まとめる」の場面では、多数決を採ったが、授業研究会では、『子どもたちは「もっと話したい」という思いがあったのか』、『無理に1時間の中で多数決でまとめなくてもいいのではないか。』という意見も出たが、今回は今まで学級会をした中で初めて1時間で今回は1時間で「出し合う→くらべる→まとめる」ができたので良かったのではないかと思う。

今までの学級会では、1時間で話し合いがまとまらず、次の授業や他の時間を取って話し合いを延ばしたことが多かった。1時間を過ぎてしまうと、子どもたちの話し合いに対する集中力が切れたり、話し合いが進まなくなってしまうことや、話題が議題やめあてとずれてきてしまうこともあった。

児童にとっても1時間で意見をまとめ、決定できたことは自分たちが進める学級会がスキルアップしたという喜びにもつながっていたように思う。

また、「まとめる」の場面については、今までも子どもたちには「多数決で決めるのは最終手段」という意識があり、折り合いの付け方に悩んできた。だが、今回はお互いの意見を「出し合う」ことや出た意見を「比べ合う」ことができたので、子どもたちの判断で多数決にすることにした。

折り合いの付け方には、他にも方法があると思うが、今後も考えていきたい。

実践事例3（第一中学校の実践）

「学年行事のまとめ方の工夫 ～自分の学びを発信するために～」

1 はじめに

昨年度、本校に赴任し2学年担任を務めることとなった。本校2学年の学年行事として「職場体験学習」を行い、学びを「新聞形式」でまとめていたときのことである。クラスの男子生徒の中にずっと伏せている外国籍の生徒が2名いた。声をかけてみると「先生、これは何？」という返答が返ってきた。書き方を説明してもペンが進まない。そこで放課後や休み時間に生徒と一緒に用紙を書き上げた。文化祭で一生懸命書いたまとめを恥ずかしそうにしながらもどこか嬉しそうに友に紹介している姿を見たときは私も嬉しくなった。それと同時に、もう少し工夫をすることでより学びが深まったのではないかと思うようになった。

2 3学年宿泊行事のまとめ方から

(1) コラージュ形式でのまとめ方の紹介

3学年となり宿泊行事である修学旅行のまとめをすることになった。平成30年度の3学年がコラージュ形式で修学旅行をまとめていたことを受け、これならうまく学びをまとめることができるのではないかと思い、本学年でも実践した。台紙となる画用紙のみを統一し、レイアウト等のその他は自由とした。生徒一人一人が思い思いに『自己の学び』を熱心に画用紙にまとめていく姿があった。

(2) A生の学びから

A生は外国籍生徒であり、校内の日本語教室へ通級している生徒である。日本語の学習を熱心に行っているが、日本語の理解や日本語での表現があまり得意でないところもある。このため日本語を使って文章を書く学習活動ではあまり意欲的に取り組むことができない姿が見られた。

修学旅行のまとめを行ったとき、「まとめ」という点で抵抗を示すA生の姿があった。他の生徒の様子を見たり、説明を聞いたりする中で抵抗感が消えたのか、まとめに使用したい写真を複数枚用意して欲しいとA生は願った。用意した写真を渡すと嬉しそうに受け取り、すぐに作業にとりかかった。さらに、友と関わり合いながら画用紙や写真を切り作業を進めるA生の姿が見られた。A生の姿は、写真や画用紙を使ってまとめもよいとしたことで安心感が生まれ、まとめの作業を行うことができた姿であると考えられる。またこの安心感によって日本語を使うことにも抵抗が薄れたのではないかと考えられる。



↑ 工夫しながら制作するA生

(3) まとめをツールとして友とのかかわりが生まれる

A生に限らず、どの生徒にもこのまとめをツールとして友とのかかわりが生まれた。普段あまり関わらない生徒同士でも会話が生まれ、他の生徒のまとめ方の良い点を認め、まねをしたり、発信したりする姿も見られるようになった。他の生徒の良い点を認め合う気持ちが高まり、学級づくりにも役立つことも分かった。



↑ 友と関わり合いながら制作するA生

3 考察

本時の授業でのA生の姿や他の学級生徒の姿を通して、画用紙に写真や付箋などを使いながらコラージュ形式でまとめたことは、日本語が不得手な生徒や自分の考えを文章に表すことが苦手な生徒に安心感を与えることに有効であると考えられる。また、まとめを通して互いを認め合い、高め合えるような心情を養うことにも有効であると考えられる。

実践事例4 (第三中学校の実践)

特別活動 取組上の工夫点 ～旅行・集団宿泊的行事のまとめ方、「付箋」の活用事例、生活ノートと学級通信～

特別活動に関わる視点で本校を観た時に、同僚の取組に創意工夫点がたくさんあることが分かってきました。それを整理し直し、3つの点から紹介していきたいと思います。

(1) 学校行事の旅行・集団宿泊的行事のまとめ方の事例

中学校学習指導要領解説の実施上の留意点にこのような文言があります。

②実施上の留意点

・・・また、事前の学習や、事後のまとめや発表などを工夫し、体験したことがより深まるような活動を工夫すること。



本校では修学旅行のまとめとして「古都 de 一句」という方法を実践してみました。班別行動の際に、これぞ古都だという1枚の写真を撮り、それに一句を添えてまとめるという方法です。

実はこのような方法の背後には1年次に行った「総合的な学習の時間」がありました。足もとの「上田」について考えたことありますか、誇りに思うモノはありますか、といった課題をもって上田の街を散策してきたという経緯があるわけです。そんな中で写真と一句を意識して「そうだ上田の街を歩いてみよう」と実践してきました。

このような積み重ねがあつての3年次の修学旅行での一句だったわけです。

(2)「付箋」の活用事例

①学級や学校における生活上の諸問題の解決の事例

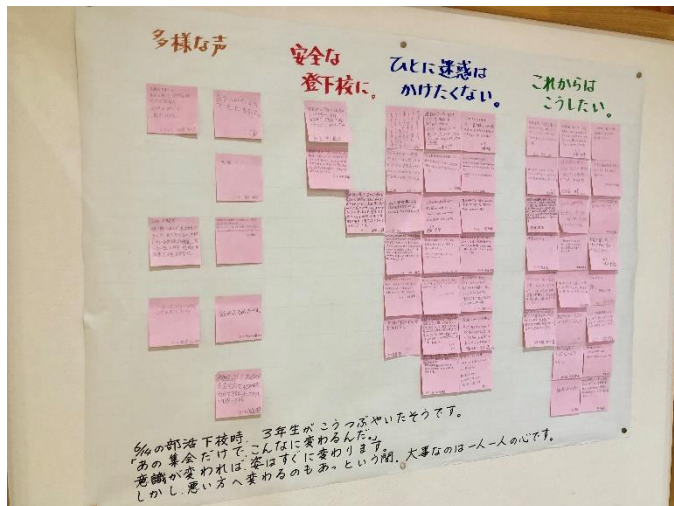
学習指導要領には次のように「合意形成」を図って、「実践」することとあります。

ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決

学級や学校における生活をよりよくするための課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図り、実践すること。

ある日の夕方、学校に一本の電話が入りました。要するに、本校生徒の登下校のマナーが悪い、教職員の姿も良くないというものでした。この一方を受けて、生徒指導担当の同僚は、職員に私も頑張っているのだが、どうしたらよいか困惑するといった投げかけをしました。これを受けて我々職員はパソコン上のシートに考えを書き込んでいくという意見交流をすることになりました。

「ルールの再確認をするべきだ」という意見や「職員の意識改革が求められていることだ」といった意見、さらには「下校のシステム化こそが必要なのではないか」、そして「生徒自身の内面を耕す全校集会が大事なのではないか」といったものが職員からは出てきました。これらはパソコンを通しての意見交流ではありましたが、なんとなく合意形成が職員の間で成立していったようにも見えました。



これらを受けて、教頭が全校集会で生徒たちにも考えてもらうよう動きました。教頭は、最後に生徒たちに『地域の方からの声を知って思ったこと』、『これからどうしていくか』、『感想』など集会後のあなたの思いを付箋に書いて、今日の下校までに模造紙へ貼ってください」と投げかけ、「付箋」に思いを書いて欲しいと問いかけました。

それぞれの学年の生徒たちは、思うことを休み時間等に書いて貼っていきました。それを放課後に教頭が整理し直し、グループ毎に張り直しました。時間にしたらわずかな全校集会でしたが、おのおのが何かを感じ、「あの集会だけで、こんなに変わるんだ」と生徒自身も感じる成果が残りました。声なき声を「付箋」という形で拾い上げ、「合意形成」とまでは行かずとも、学校の問題を改善していった事例だったように思いました。

②修学旅行のまとめ・部活動への思いなどの事例



付箋を使った事例は本校の場合、他にもいくつかあります。それは、「修学旅行のまとめ」や「係活動としての反省」、「職場体験学習での反省点」そして「部活動」です。中体連の大会に臨む思いと仲間へのエールといったものを「付箋」に記し、この思いを胸に壮行会に臨む選手たちがいたのも事実です。

(3) 生活ノートと学級通信の事例

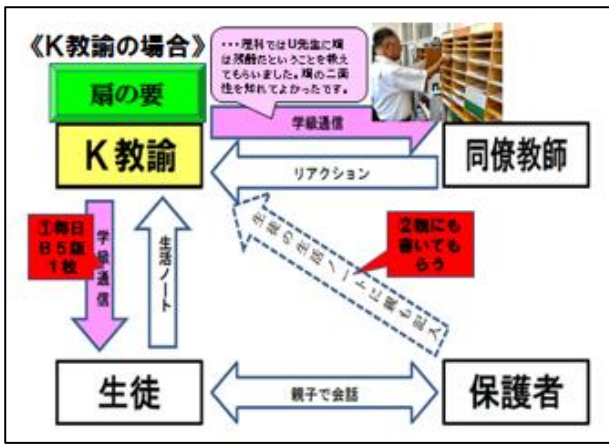


「学習指導要領解説」には「教師と生徒及び生徒相互の人的な触れ合いを基盤とする指導」や「生徒と共に考え、歩もうとする教師の態度が大切」といった文言があります。当然と言えば当然なのかも知れませんが、その為のツールとして上田市では「紡ぐ」という「生活ノート」があります。皆さんは、この「生活ノート」の位置づけをどのように考えておられるでしょうか。私の心に強く印象付いた同僚のK先生のことを紹介したいと思います。

K教諭は、「生活ノート」を活用して生徒の生の声を「学級通信」にしています。その声の中には当然、教科教育に関わるものもあります。そうするとK教諭は、その教科担任のレターボックスにその日の「学級通信」を入れるわけです。このように「生活ノート」と「学級通信」を使って『生徒』、『同僚教師』さらには『保護者』をつなぐ「扇の要」の役割を担っているのです。

このK教諭の“工夫”というか“こだわり”の一端をもう少し紹介します。

1つは「毎日B5版1枚で学級通信を発信している」こと。2つ目は「親にも生活ノートにコメントを



書いてもらっている」ことです。

1つ目の「毎日 B5 版で 1 枚の学級通信」にはどんな思いがあるのか聞いてみました。すると、色々なことが分かってきました。自身の小 6 の時の担任の先生の影響、また 1 校目、2 校目では実現できなかったが、3 校目にしてこのスタイルが定着したこと、さらには空き時間 1 時間あれば「生活ノート」を読み、「学級通信」を執筆している働き方等でした。

K 教諭が私に言いました。「先生は空き時間に何をしているんですか？」と。私は何をしているのだから。

う。何かをしているのは間違いないが、K 先生のように「仕事の流儀」のようなものはなかったのかも知れないと思い知らされました。

K 教諭 2 つ目のこだわりが「親にも書いてもらう生活ノート」です。私は、生活ノートというものは、教師と生徒をつなげるツールだと思っていたのですが、K 教諭は違います。半分以上の保護者は励ましや自分の考えなど多岐に渡るそうですが、書いてくれているそうです。そうすると、学級 PTA などでも話題になるのだそうです。「親としても背中を押してもらえている感じで嬉しい」や「面と向かっては我が子に言えないことも書いてしまう」、さらには「我が子のクラスの子との距離が短く感じる」など肯定的な意見ばかりのようです。

私としては 3 点について本校職員の「創意工夫」について紹介してきました。このように自分たちの実践を振り返ったり、同僚の意見に耳を傾けたりするだけで、明日のヒントがあったように思いました。これからもこうして自身を更新しつづける自分でありたいと思います。

五 研究のまとめと課題

(1) 教育課程研究協議会（午後の研究協議内容）

- ① 第一中学校の実践発表 [学年行事のまとめ方について] (10分)
- ② 質問・感想 (5分)
- ③ 第三中学校の実践発表 [特別活動取組上の工夫点について] (10分)
- ④ 質問・感想 (5分)
- ⑤ 青木小学校の実践発表 [考えを深められる学級会の在り方について] (10分)
- ⑥ 質問・感想 (5分)
- ⑦ 各校や各自の工夫していることの見聞交流 [グループ] (30分)
- ⑧ 意見交流で話題になったことの発表 (15分)
- ⑨ 指導主事のご指導 (10分)

☆参加者一人一人が、日頃の実践と委員の実践発表を関連付けながら指導の具体や工夫、悩みについて学習指導要領も踏まえながら振り返り情報交換ができた。

(2) 委員の実践事例発表から

○それぞれの実践を知ることで、自分の知識を広げることができた。また、小中を見通した特別活動について考えるよい機会となった。

△委員の人数が増えることで、多くの実践を研究したり共有したりでき、より充実した委員会となった。

六 委員名簿

推進係・・・鹿取ちか（丸子中央小）

委員・・・依田豊（青木小）、福島章浩（柵津小）、召田幸司（三中）、中村直樹（一中）